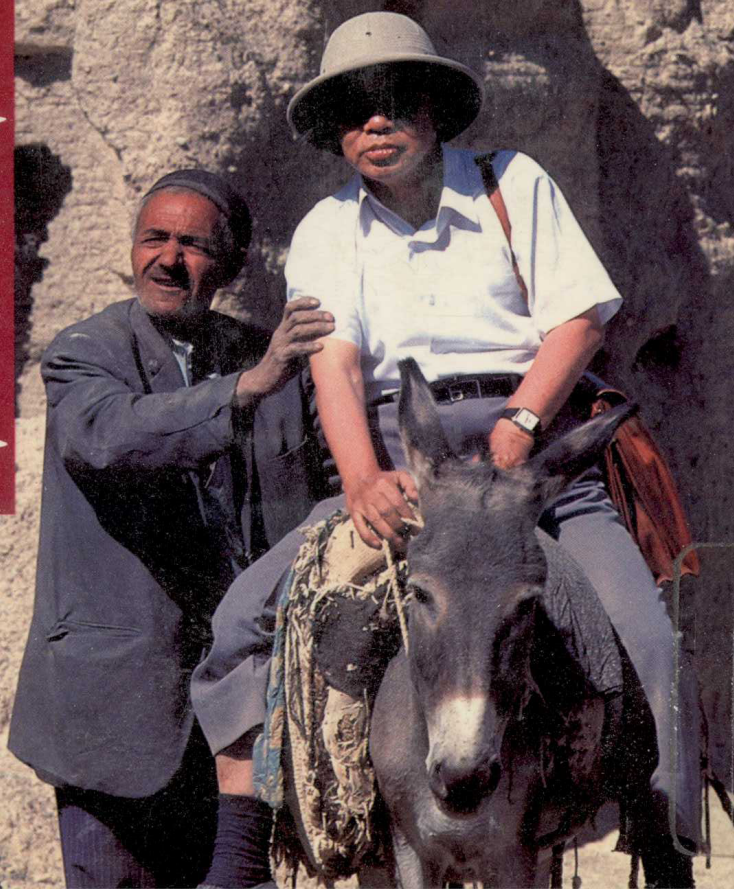


松本清張

小説と古史への旅



日本放送出版協会

松本清張

小説と古史への旅

小説と古史への旅

昭和五十八年十二月二十日 第一刷発行

定価——一三〇〇円

〈検印廃止〉 著者——松本 清張

発行者——藤根井 和夫

発行所——日本放送出版協会

150 東京都渋谷区宇田川町四一—一

電話(〇三) 四六四—七三一(代表)

振替・東京——四九七〇—

印刷——(本文) 株式会社三秀舎

印刷——(カバー) 株式会社大熊整美堂

写真植字——小野工房

製版所——大森写真製版所

製本——株式会社石津製本所

村井康彦
吉村 伶

白井千鶴子
大根田匡子

写真提供

朝日新聞西部本社
旺文社
講談社
松竹株式会社
平凡社
日本交通公社

石橋財団・石橋美術館
茨城県勝田市教育委員会
大阪府立泉大津高等学校
岡山県和気郡和気町役場
加曾利貝塚博物館
神奈川県立博物館
九州歴史資料館
宮内庁正倉院事務所
倉野憲司
埼玉県立さきたま資料館
島根県安木市教育委員会
東京芸術大学
東京国立博物館
栃木県芳賀郡芳賀町社会教育課
永井昌文
奈良国立文化財研究所
走水神社
法隆寺
八重垣神社

遠記

久保田速記事務所（狐塚美千枝）
小原正太郎

編集協力

田中美徳

著者略歴

松本清張（まつもと・せいちょう）

1909（明治42）年，北九州市小倉に生まれる。朝日新聞西部本社に勤務していた1952年、『三田文学』に発表した「或る『小倉日記』伝」で，第28回の芥川賞を受賞し，文壇に出た。以来，短編探偵小説集『顔』で探偵作家クラブ賞を受けた後，『点と線』『眼の壁』『蒼い描点』『黒い画集』『ゼロの焦点』等々，人間そして社会を仰角的な視点から描く，その“社会性”を重んずる作風から，社会派推理作家と称されている。近作には『空の城』『天才画の女』『黒革の手帖』『十万分の一の偶然』『疑惑』『彩り河』『迷走地図』など，現代小説，歴史小説を『松本清張全集』として刊行中。

こうした創作活動が続けるかたわら，考古学・古代史の謎の解明にも精力的に取り組み，厳密な考証と犀利な眼で独創的な史論を展開する。

古代史関係の主な著作

『古代史疑』（中央公論社）
『邪馬台国の謎を探る』（平凡社）
『遊古疑考』（新潮社）
『古代探求』（文藝春秋）
『日本史 謎と鍵』（平凡社）
『私説古風土記』（平凡社）
『火の路』（文藝春秋）
『眩入』（中央公論社）
『古代史私注』（講談社）
『清張通史1 邪馬台国』
『清張通史2 空白の世紀』
『清張通史3 カミと青銅の迷路』
『清張通史4 天皇と豪族』
『清張通史5 壬申の乱』
『清張通史6 寧楽』（以上，講談社）

『清張 古代史をゆくーペルセポリス から飛鳥へ』

『正倉院への道』（編著）

『清張 古代史記』

『清張 歴史遊記』

『銅鐸と女王国の時代』（編著）（以上，日本放送出版協会）

協力（敬称略）

青木和夫

中西 進

森 浩一

鳥取大学教育学部同窓会

新日本海新聞社

サントリー株式会社

電通

講談社

福岡県教職員互助会

銚子市

銚子市教育委員会

NHK千葉放送局

日本交通公社

岡山県和気郡和気町

學燈社

写真撮影

飯田隆夫

石元泰博

入江泰吉

小野成視

木本義一

河野 豊

今駒清則

菅原夢子

松本清張

目次

1	小説の材料	1
2	わたしの小説取材から見た人物像	35
3	岡倉天心とその周辺	53
4	わたしの小説作法	81
5	古代史へのいざない	101
6	祭神の謎と神事	127
7	道鏡事件の謎と清麻呂	149
8	古代を検証する	177

——「松本清張説」をめぐる共同討議——

青木和夫 中西進 森浩一

松本清張

I

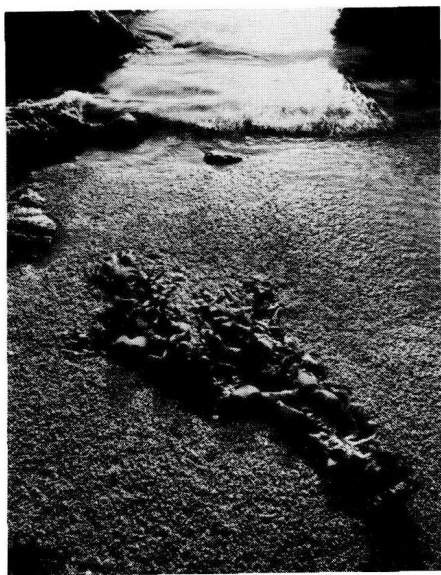
小説の材料

いまご紹介にありましたように、わたしの父は鳥取県とは非常に縁が深いのであります。これを申しますと長くなりますので、興味をお持ちの方は、わたしの『半生の記』をごらんになっていただきたいと思っています。

こうして壇上から眺めますと、ご婦人がたがたくさんいらっしゃいます。みんなおきれいでございます。これはお世辞じゃないんです。伝統的に出雲美人といひましてね、美人の産地であります。

この美人の産地は、どういうものか昔から日本海側が多いんです。まず筑前美人といひまして、博多美人です。それから出雲美人、それからずっと東のほうに行きまして、京美人の産地は内陸のほうに入っておりますが、やはり日本海側の系統でしょう。それからまた東のほうに行くと越後美人。もっと東のほうに行きますと山形美人とか、秋田美人とかいろいろございます。全部日本海側であります。太平洋側では、申しわけないけれど伝統的な土佐美人というのを聞いたことがあります。鹿児島美人というのも聞いたことがない。これはどういうわけでしょうか。

わたしは、これは日本海側の土地が、大陸ときわめて近いということと無縁ではなかるうと思ひます。要するに、博多人形とか京人形などを見ておりますと、富士額ふじがし、そして肌が雪のように白くてきめが細かい。眉と目の間がやや開いている。彫りは深くない、浅いほうですね。どちらかというと平らなほうであります。しかし抜けるように色が白い。全部共通しております。これはおそらく大陸系の顔であろうと思ひます。



志賀島の海岸（撮影 石元泰博）

大陸系といえ、こうした血の流れはどのように伝わって、日本海側に伝播したのでしょうか。おそらくそれは、昔、船に乗って各地を漁業していく集団があつて、かれらが沿岸づたいに漁をしてるうちに、どこかに根拠地を持つ。その根拠地に留まるたびごとに美人の系統を残していた、あるいは伝播させていったと思います。

その漁業とは何かと申しますと、その一つに潜水海女があります。海に潜ってアワビ、サザエ、そういうものを採る漁業の女性であります。北九州の、博多より少し東の宗像神社の近くにある

阿曇郷あずみという地名が、平安朝時代の百科

事典でございます『和名抄』の中に出ております。この潜水海女の技術は、おそらくこの北九州から発して、対馬、壱岐、さらには済州島まで行っている。鹿児島県のほうに少し迂回すればと思うんですが、けれども、有明海、熊本県側には行っていないんです。東のほうにばかり行っている。鳥取県でいえば青谷町あおやに夏泊なつどまりというところがございます。米子から東、鳥取市の少し西のほうに当たります。そこが

やはり潜水海女の根拠地であります。わたしは一度その夏泊に行ったことがございます。その漁村の人には、特殊な言葉遣いがありまして、その言葉遣いの中に九州なまりがあるんです。筑前なまりです。さらに有名なのは、能登半島の舩倉島の潜水海女でございます。能登半島の突端、輪島に近い珠洲というところに海士町がございまして、そこからシーズンになりますと舩倉島——能登半島の突端からかなり離れておりますが、その島に渡って漁業季節のあいだすみついてゐるのでありますが、その舩倉島の潜水海女が、これまた筑前言葉であります。

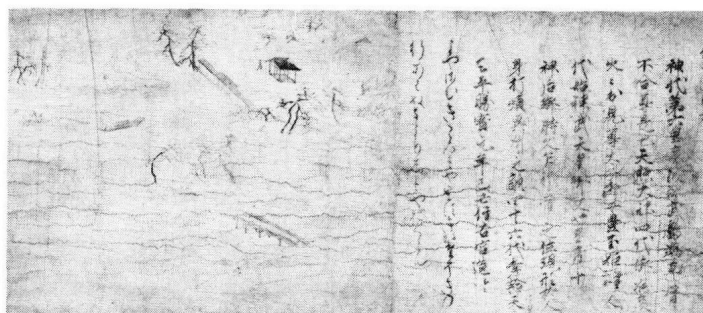
『万葉集』の撰者といわれる大伴家持が天平一八年（七四六）越中守として、この能登半島を視察したことがあります。視察といえば体裁がいいんですけれども、彼は税帳使守として税金を取り立てに回ったんですね。この、きわめて現実的で殺風景な任務を帯びた家持が、能登をめぐって、『万葉集』に数多くの潜水海女の歌を残しております。

たとえば「水鳥を越前判官大伴宿禰池主に贈る歌一首」という長歌があります。その中で「……早き瀬に 水鳥を潜けつつ 月に日に 然し遊ばね 愛しきわが背子」（巻十九・四一八九）と詠んでいます。その中に「潜る」という意味の言葉が「かつぐ」あるいは「かづく」と書いています。いまでも筑前の鐘崎海岸地方では「潜る」ことを「かつぐ」といっております。

そしてまた、そういう技術のみならず、筑前の阿曇郷の「あずみ」という名前が各地に伝わっております。阿曇郷というのは、福岡県宗像郡の、先ほど申しあげた鐘崎、現在の玄海町です。近くに宗像神社があります。その「あずみ」の名が太平洋側にもあります。だいたい潜水海女の

分布は、日本海側に沿っては青森県までいっておりますが、太平洋側では、土佐の室戸岬にあります。それから志摩半島の東側の英虞湾。いまは真珠のほうの養殖地になっておりますけれども、昔はアワビを採る潜水海女の根拠地でありました。さらに伊勢湾、三河湾でございますね。三河湾では、「あずみ」というのは渥美半島の名前で残っている。もっと東にまいますと、伊豆、それから房総半島の突端の白浜。その北限はどこかと申しますと、仙台のものと北の金華山、このへんがだいたい北限であります。そういうふうにして潜水海女の技術は伝わっている。

そういった集団はいわば海上の漁業ジプシーでありました。今日、香港とかマカオにおいてになった方はごらんになったと思いますが、そこには海上生活者の船がたくさんある。それらは、昔はおそらくほうぼうを漁業して回ったでしょうけれども、ついにはある根拠地に定着して、船上生活をしております。中国では蛋民^{たんみん}といって水上生活者が広東省や福建省など南シナ海沿岸地方に住んでおります。日本の海上生活者はそれとは違いますが、似たところもあります。わたしが小さいころに、下関の壇之浦あたりには、まだそういう海上生活者がおりました。ところが海上生活だけではどうも不便で、農耕生活に移りたいという人が、こんどは海辺から内陸のほうに入って、そして農耕生活を営むようになる。それでもやっぱり故郷の名前は忘れられないとみえて、たとえば長野県に安曇郡という名があります。これは駿河湾のほうから入ったのか、あるいは新潟県のほうから入ったのか分かりませんが、とにかく中部地方で一番南北の幅の広い地帯の真ん中に安曇郷があるのです。



住吉大社（佐竹本『三十六歌仙絵』東京国立博物館蔵）

だいたいどこに行っても、故郷の名前をつけたがるものです。イギリスの移民がアメリカに行きますと、故郷の名前をつけて、それに「ニュー」という語を頭に付しているのはご承知のとおりであります。

潜水海女が分布している傍証として、もう一つ申し上げたいのは、さきほどふれた宗像神社であります。宗像神社はおそらく阿曇郷の共同神であると思います。そういう漁業民族の共同神が各地にあった。たとえばいまの阿曇郷は宗像神社。瀬戸内海の東の果ての行き着き場、タミナルであるところの大阪に住吉神社があります、昔の住之江神社です。このように東と西と、この瀬戸内海の両方を扼したところに、同系統の漁業民族の共同神があるんです。伊勢神宮の元の名前は磯宮いそのみやといいます。磯宮というのも、昔そのへんにいたところの漁業集団の共同神なんです。正確に言えば度会わたがひという種族が伊勢におりました、これは明らかに漁業種族であります。ですから、いまの宗像神社の名前にいたしましたも、『古事記』『日本書紀』を見ますと、宗像は「胸肩」と身体の名前がつけてありますけれども、

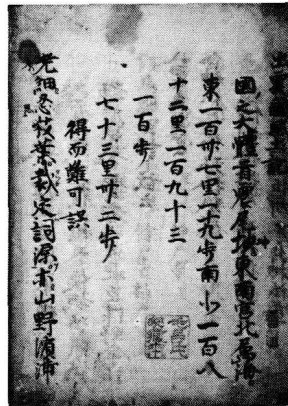
後になると、それが「宗像」になり、それがさらに変わりまして「宗方」になります。もつと北のほうに行くくと「棟方」になっていきます。版画家の棟方志功さんなどがそうで、棟方さんは青森県生まれです。

そういうふう to 考えますと、わたしは、古代は日本海側が太平洋側よりもずっと文化の中心であったと思います。古代にはアメリカありませんし、東南アジアとの行き来はない。もつぱら大陸との交通でありますから、日本海側に文化が発達したと思います。

それはいろいろなことからいえますが、日本海側の中でもこの出雲は特別に面白いことがある。わたしは、『日本書紀』『古事記』に書いてある出雲の姿と、のちに撰上された『出雲国風土記』の内容が、非常に大きく違うということに興味を持ちます。

「風土記」というのは、七一三年に中央政府が各国に命じまして、その土地の名前の由来、土地に因む伝説、それから故老といえますから、お年寄りの話、さらには名所、物産、そういうものを書き出しなさいということを、地方長官に命令を出しております。それに対する報告を「解^げ」といいます。上から命令されたことに対する報告であります。ところが各国ともその解がなかなかできなかったのです。

律令体制は、ご承知のとおり奈良時代のだいたい天平あたりが最盛期であります。天皇でいえば聖武天皇、この時期が律令体制が盛んなときであります。それがだんだんに緩んで、平安時代になると律令体制がすっかりガタがきている。そこでネジを巻かなければならないというので、



『出雲国風土記』(倉野憲司蔵)

で残っているのは、『出雲国風土記』『常陸国風土記』『豊後国風土記』『肥前国風土記』『播磨国風土記』の五つでございまして、あとは全部『逸文』といひまして、断片的なものがいろいろな本にちよこつと引用されているだけです。

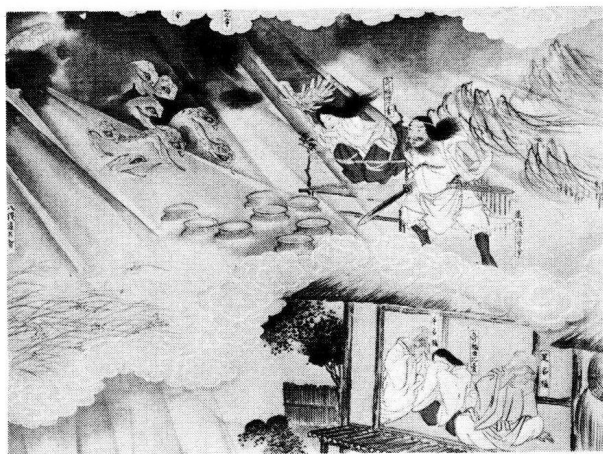
その中で、『出雲国風土記』が一番古いといわれるのは、文体が特殊だからです。『常陸国風土記』になると、唐代に流行^{はや}った四六駢儷^{しうくへんれい}体という美文調を真似たものであります。対語というのがありますね、天といえは地というようなことですが、それを使って調子よく書かれています。ところが『出雲国風土記』にはそういう妙に凝った文章がございません。素朴な文章です。『播磨国風土記』は「記紀」の応神天皇や天の日槍^{あひこ}などが出てきて、「記紀」の影響が見られる。『豊後国風土記』にいたっては、『書紀』の記載にあきらかにしたがつております。ということでは、『出雲国風土記』は、いま申しあげた五つの「風土記」の中でもっとも早く中央政府に提出され

平安朝の中期のころに延長三年(九二五)に、中央政府が催促をしています。「風土記」を出しなさいという命令を出している。『出雲国風土記』も奥書にあるように果して「出雲臣廣嶋」の名で天平五年(七三三)に勘造(筆録編さんの意)されたものかどうか分からない。あるいは延長三年の督促に応じて出したものかも知れません。そもそも「風土記」のうち、まとまった形

たのではないかということがいわれております。

その『出雲国風土記』ですが、どこが「記紀」と違うかというと、『古事記』にはヤマタノオロチ退治の話があります。スサノオが高天原から追放されて、そして肥の河上に降る。それからオロチ退治になるんですが、そういうものは『出雲国風土記』にはございません。それからオオクニヌシノ命があんまり活躍しない。オオナムジの神すなわちオオクニヌシが気多の前を通りかかると、裸にされた白兔が泣いている。隠岐島からこつちへ渡つてくるときに海上に橋のようにならんだワニに欺かれて、着物を剝がれたといったような話もちろんございません。どうしてそうなのかということを考えますと、スサノオというのは、もともと出雲の土地神としては存在していた。それが『出雲国風土記』に出ておりますから。しかし、この『出雲国風土記』のスサノオは土地のたくさんの神々を生む生殖神だけになっております。その子神たちの名のほとんどは「記紀」に出てきません。

それはどういうわけだろうか。わたしはこう思います。すなわち中央政府は、一つの日本の説話、朝廷あるいは皇室の由来を長篇小説に書く場合に、大和、出雲、日向、この三つのストーリーをどうしても長篇の中に綴り合わせなければならなかった。つまり大和には大和の話があり、出雲には出雲の説話がある。九州には九州の話がある。こういうふうにはばらばらになっているのを一つの長篇に纏めるためには、それらをつなぐ団子の串のようなものが要です。その団子の串になっているのが、天上界を追放されたスサノオが出雲に降る話であります。これで



スサノオノ命のオロチ退治 (堀江友声筆 高橋重聰藏)

大和と出雲とが結ばれる。つまり大和の説話は「天上界」の話ということにしているのです。

ところが出雲のほうでは、アマテラスの希望に沿って、すっかり国土を天孫に献上しましょう、ということになった。それなのに、天孫ニギは受け入れの用意万端ができた出雲国には降らないで、西の日向のほうに突然行ってしまふ。高千穂のクシフル岳に降った、とある。その理由はなにも書いてありません。せっかく用意していた出雲のほうは肩すかしであります。天孫が不意に降った九州のほうでは、またいろいろな説話があるのですが、それは、こういう不自然さをつなぎ、各個別々の話をつなぎ合わせるためのストーリーなのであります。九州から皇室の祖先は大和に戻らなくてはならない。それが日

向で生まれた神武天皇であると、こういうふうな循環的な構成になっております。そのために、どうしても『古事記』は、出雲国のヤマタノオロチ退治も書かなければならないし、それから白兔の話も作らなければならなかったのです。



ボロブドゥールのナーガ

これにはネタ本があるのです。白兔のほうから申しますと、いまの蒙古のあたりに、高麗という一種の遊牧民族の国があったのです。その高麗の王の息子に、東明（東盟）というものがおりました。この東明は、いつも馬を乗りならし、騎射が巧みだった。父親が子に国を奪われることを恐れてこれを殺そうとした。東明は逃れて南のほうへ逃げますと、施掩水（しえんすい）という大きな川があった。父親の軍勢が迫ったときに、東明が施掩水の水面を弓で叩くと、川の中から魚やスッポンが浮かんではらび、橋を作ったんです。東明が向こう岸に渡りきったときに魚やスッポンが散ってしまった。追いかけてきた軍隊はそれを追跡することが出来なかった。そこで東明は夫余の王になつたというのです。『魏志』『東夷伝』に載っております。そういうものを讀んだ中央政府の文官がそれを取って、オオナムジと、稲羽（後の因幡国）の白兔（素兔）の話につくりかえたにちがいありません。

それからヤマタノオロチ退治の話があります。大蛇の尻尾から劍が出たのを、中国山地の砂鉄を象徴しているとか、八岐（ヤマト）というのは出雲にたくさん流れている川を象徴しているとか、あるいは砦（やしろ）です、城、防塞、そういうものが山を取り巻いている姿を形容してヤマタノオロチとしたのではないかなどといっております。わたしは、ヤマタノオロチというのは、おそらく東南アジアのほうからの話が伝わってきたのではないかと思います。それが中央政府によって書かれた。したがってヤマタノオロチと出雲